

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520390

研究課題名 (和文) 生成能力に厳しい制限を課す音韻表示の開発

研究課題名 (英文) Developing Phonological Representations which Restrict Generative Capacity

研究代表者

Backley Phillip

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20335988

研究成果の概要：

交付額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,100,000 | 0       | 1,100,000 |
| 2007年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 3,000,000 | 570,000 | 3,570,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語、言語学、音韻論、エレメント理論

## 1. 研究開始当初の背景

長年にわたり、分節表示理論の主流である SPE タイプの素性は、その生成能力において、厳しい制限が見られないため、音韻現象を記述することはできても、文法性をその表示から説明するのは難しい。この現状を踏まえ、最近では、エレメント理論による音韻分析が脚光を浴びるようになった。

## 2. 研究の目的

本研究の主な目的は、英語の音構造を説明するための音韻知識に関するモデルを構築し、発展させることにあった。特に、SPE 理論や最適性理論に見られる諸問題の大半を解決するために、(エレメントを用いた)分節内構造と超分節構造を統合したモデルの考案をした。

## 3. 研究の方法

主に、英語音の音響信号上の特性を、音韻現象と照らし合わせることで、話し手と聞き手の共有する言語学的情報を特定化した。その情報をもとにしてエレメント理論を発展させ、英語音の多様性を説明するための表示モデルを構築した。

## 4. 研究成果

エレメントが音響信号上でどのように具現化されるかを、母音を中心に特定化し、その結果を援用し、英語の異なる(方言の)母音体系を説明した。また、考案したモデルを用いることで SPE タイプの素性理論では、説明できなかったより複雑な母音体系も、生成能力に厳しい制限を課した状態で、説明することが可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

K. Nasukawa & P. Backley (2008): Affrication as a Performance Device, *Phonological Studies* 11, 35-46

P. Backley & K. Nasukawa (2009): Representing Labials and Velars: a Single 'Dark' Element, *Phonological Studies* 12

[学会発表] (計 7 件)

P. Backley & K. Nasukawa (2006): Headship as Melodic Strength, *Strength Relations in Phonology Workshop*, Restrictive Phonology Research Group, Sendai, Japan, 2006年9月

K. Nasukawa & P. Backley (2007): Contour Segments as Discordant Stops, 15<sup>th</sup> Manchester Phonology Meeting, Manchester, UK, 2007年5月

K. Nasukawa & P. Backley (2007): English Affricates as Discordant Stops, 2<sup>nd</sup> International Conference on the Linguistics of Contemporary English, Toulouse, France, 2007年7月

K. Nasukawa & P. Backley (2007): Affrication as a Performance Device, 日本音韻論学会(札幌), 2007年8月

P. Backley & K. Nasukawa (2008): Features as Speech Signal Patterns, 16<sup>th</sup> Manchester Phonology Meeting, Manchester, UK, 2008年5月

P. Backley & K. Nasukawa (2008): Representing Labials and Velars: a Single 'Dark' Element, 日本音韻論学会(金沢), 2008年8月

K. Nasukawa & P. Backley (2009): The Foot: a Unified Entity for both Metrical and Segmental Phenomena, CUNY Conference on the Foot in Phonology, New York, 2009年1月

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者